

他のところを加えて千五百人ほど、警備兵らからの噂でそれとなくダモイのことを知った。

帰還列車では二週間ほどを要したが、集結地のナホトカでは五日間くらいいたように思う。特に洗脳教育などなかった。帰還船名は確か「高砂丸」と記憶しており、千五百人ほど乗船し帰ってきたように思うが、定かではない。帰還船内では嬉しさばかりで満ちあふれていた。

昭和二十五年一月二十一日舞鶴港に上陸し、その後家路につき、故郷である海南市に着いた。軍隊生活は現役入隊であったが、次第に生活に慣れて自らの努力により地位を得てきた。四年五カ月に及ぶ抑留生活も他の收容所のこととは存じ上げないが、ソ連側收容所長以下当事者一同の人柄もよく、もちろん我々抑留者相互の自主的協力行動と自発的な所内改善の行動を可として受けとめたソ連側担当者の良識と呼応して、比較的に精神的苦悩も少なく過ごすことができたことは抑留者全員の幸福であった。

帰還復員後の生活は、元の家業である漆器製造業に

従事し現在に至っているが、戦後の生活として厳しく「紆余曲折」、この文字通り事情込み入って、心身ともに苦悩の五十年の戦後生活であった。今の家内と結婚したのは昭和二十六年三月であったが、二女を得て、それぞれに家庭を結び活躍していることは喜ばしい。

私も夫婦は今も現役として、木谷、堅谷両家の後継者として最善を尽くし、公私ともに社会的存在を残し得た私自身に喜びを覚えている現在である。これからは、ますます健康管理第一として過ごしてまいりたいと考えている。

## 抑留の労苦、後遺症の続く戦後

和歌山県 山本 富三

大正十四年五月二十七日、現在の海南市幡川葉師谷四一七番地で私は生まれた。当時、家業は農業で、昭和十五年父死亡、母と弟妹がこれを継ぎ、強制出荷用米作りと、割り当て供出用馬草刈りに従事していた。

長男、次男は既に兵役に。

私は、海南市立大野尋常高等小学校高等科を昭和十五年三月卒業。同年四月、大阪陸軍造兵廠技能者養成所に入所。十八年卒業。同廠第一製造所第六工場配属となり、仕上げ工として火砲の部品づくり。昭和十九年五月、同廠和歌山工場に転じた。その年の九月、大阪第三十部隊に現役兵として入隊。夏服、帯剣、飯盒、水筒、雑嚢、毛布等が装備として与えられ、数日後、大阪駅を出発、列車で下関へ。下関から乗船し、釜山港へ向かった。これよりハルビンに向かい、下車後トラックで関東軍第三六六部隊に十月九日入隊、兵科は技術兵であった。六カ月技術教育を受け、次に「ダイトツセン」所在の関東軍野戦自動車廠第二六三八隊に配属され、第三移動修理班勤務となり、近隣部隊の自動車、戦車等の修理を担当。それは昭和二十年四月であった。

ソ連軍の不法侵略の時は間島省延吉市に修理班としていました。突然、作業中止の命令があり、内務班に戻り、銃と剣、二食分の乾パンを雑嚢に入れ水筒を携

帯して上官の指示通り東の方に向かった。交戦もないまま二日ほどして味方のトラックに迎えられて乗せてもらったが、着いた所の地名は分からない。

「陛下の終戦の詔勅」は雑音のためほとんどわからなかった。後で班長が、いつもと違った様子で「戦争が終わったんだよ」と言われた。隣にいた古兵が小さな声で私たちの方を向いて「日本は負けたんだよ」と言った。ちょっと信用できない気持ちであったが、周囲の様子で何となく本当なんだと悟った。一瞬とめどなく無念の涙があふれ出た。

終戦後、ソ連軍と直接対面したのは延吉での武装解除の時が初めてで、白旗を掲げたソ連側の使者と警備兵が来た。着剣し自動小銃を構えたソ連兵に監視されながら、武器に類するものすべて一カ所に山積みにして集めさせられた。

「武士の魂」とされてきたものをスクラップ同然のありさまで、戦うこともなきままの「哀れ」と「悲しさ」をしみじみと味わう。武装解除を終えてからは、まず自分自身の整理からで、日本に帰るための準備。

テントを引き裂いて大きなリュックサックをつくり、食料や日用品を背負えるだけのものを詰め込んだ。これも本部の書類焼却や糧秣受領のこともあって、間を以ての私なりに精一杯の作業だった。

八月下旬に延吉を出発、「東京ダモイ」とだまされているということを知りながら歩み出した。もちろん、行く先は私たちには全く知る術もなかった。行軍途中で一番困ったことは、水と草木だ。道中での炊事の材料不足に悩まされたことで、これは当時の事情としては当然のことであると気づいたのは、私たちよりこの道を先行された同胞皆さまの行く道々での苦勞のほどが我が身に照らして明らかに推察することができたからだった。しかし現実には、私たち自身の食生活は困窮の日々であった。暑中の強行軍と下痢患者続出、食事対策の不備等、すべて悪条件の中での移動であった。

この道中で目の当たりに見た悲しくも痛ましい姿は、男装の母とその子らしい十数人のグループの方々に、別れの手を振られたこと。いま一つは、琿春峠コシヤツの近く

に日ソ両軍の破壊兵器と遺体がところどころに野積みされ、筵のようなものをかぶせられていたのを見たときで、思わず声を出し目を閉じて冥福を祈った。

当時はどこを歩いているか地理不案内で、今思えば琿春を経てソ連領内に入り、クラスキノ收容所に結集し一時期を過ごしたが、移動し、有蓋貨車に詰め込まれ身動きもできず床の隙間から用便をすました者もいた。走行中は外の景色は見せてくれず、昼間停車で夜走る。また、二日くらい停車したままのときもあった。

十日ほど過ごしてやっと收容所。約五百人ないし六百人がらいだったと思う。最初の時は自活作業が多くノルマもなく、滞在期間も短かったが、次の收容所からはノルマに追いまくられた。伐採、線路工事、線路延長路盤工事、荷役、積み込み、水道工事、煉瓦工場等々、すべて重労働ばかりであった。ノルマ達成時にはパンの特配も時にはあったが、達成できないことが多いため減量の心配ばかりさせられた。

労働時間はおおむね八時間であったが、突然、夜中に着いた貨車のバラス落としに駆り出されることは全

く辛かった。常に空腹であるので眠れない。そんなときの夜中までの作業や夜中から朝までの使役は楽なものがなく、疲れが翌日まで及んで、食糧の不足、栄養値の不足、睡眠の不足、この不足がちのすべてが栄養失調の人をふやしていった。これらの不足は自ら補うよりほかなく、松葉、野草、木の芽、きのこを煮るか煎じるかして生命をつなぐことに精一杯の努力を続けてきた人たちが今日の日を迎えることができていると思う。

実際、収容されて一年余りは生きて帰れることに希望を持っていたが、年を重ねるにつれてだんだんと生への希望も薄らいで、帰国のことすら疑問を持つようになった。このようにこき使われ、最後に自分の墓穴も掘らされるのではないだろうかと言う者も出てきた。この私もそう思った。

この頃から洗脳教育が実施されるようになって、次第に抑留者の中には考え方が変わってきた者もいて、同僚との会話も多くなり討論する場も出てきて、作業場への往復も労働歌を歌い、何となく活気が出てきた

ようだった。思想について云々するよりも、私たちに「生きている間は活気」が欲しかった。

沿海州アムール河流域の第一〇二収容所で、昭和二十四年七月末ごろに本当の「東京ダモイ」のことを聞かされた。約一千人くらいのダモイ有蓋列車で、以前に比べて楽々のナホトカへの旅であった。

ナホトカ港で「明優丸」に乗船。七月二十六日であったと思う。夢中でタラップを駆け登ったことや、昭和二十四年七月二十九日舞鶴上陸、本土に足を踏み入れた記憶は忘れることはない。

この機会に述べておきたいのは、その当時のソ連領での四年間の過酷な抑留生活に加えて、帰国後の私たちを、ソ連抑留者であったというだけで就職させない社会的偏見など、昭和二十五年以後も敗戦の重い後遺症として私たちの生活にのしかかって苦しめ続けられた。組の臨時雇、酒造会社へ、また清涼飲料水製造販売自営、次いで同業三社合併会社設立、四十七年三月解散、個人販売と兼業。繊維加工業、これも製造業打ち切り、また清涼飲料水自動販売機による営業を始め

て今日に至っているが、帰還後の生活もまた「有為転変」であった。

舞鶴に上陸し故郷に帰った時点でシベリアでの労苦の終結としたかったが、その後の祖国での生活の厳しさは、戦後のことだから皆苦しさは同じだという意味で忘れ去られた。過去の世界史に前例のない、戦後のソ連強制抑留についての国民的理解が必要であると思う。

### 「観艦式」

ソ連邦の娘さんよ、ありがとう

和歌山県 岡本 広 蔵

大正十一年七月三日、岡本源之助、松枝の三男として、現海南市船尾一五一番地にて出生。昭和四年黒江小学校に入学、同十年尋常科を卒業、家庭の漆器木工業に従事すると同時に夜間の学校に通学しました。漆器界不振により、有田郡八幡村で林業に昭和十五年よ

り従事。十八年、大阪府信田山、大日本工機株に入社。家族は、妻秀子、長男幹夫と三人家族でしたが、昭和五十六年、次男の洋司は白血病で他界しました。

昭和十七年に徴兵検査、第二乙種。前職に勤務中、昭和十九年八月召集され、和歌山二十四部隊に入隊。三カ月の訓練後十九年十二月、堺市金岡部隊に転属。各地からの応召者二十三歳から四十歳くらいの寄せ集め部隊に感ぜられました。ある夜、大阪駅より出て、朝、下関より釜山へ。そして北朝鮮平壤着、平壤第一〇九飛行大隊に配属されました。

ここでの生活は飛行場勤務ですが、私は歩兵科でした。新兵の私には意外と思うほど、私が接した上官は皆親切な方々ばかりで、入隊以来一度も軍隊でビンタを受けたことはありませんでした。特に楽しかったのは将校の集会所でした。国民に対しては誠に申し訳ないことであると私は思っていました。この部隊では八十人の少尉殿がいて、毎晩大宴会の連続で、私もみんなに勧められて大酒飲みにさせられていました。

その後、ある農村へ行かされましたが、そこは、あ